



Title	真山青果の史劇にみる江戸開城のメタヒストリー
Author(s)	平尾, 漱太
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 46-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79346
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

真山青果の史劇にみる江戸開城のメタヒストリー

日本学専門分野 博士前期課程 1 年

平尾 漱太

はじめに

本発表は、二つの問題関心の交点に成立している。一つ目は、近代日本において歴史的事象や歴史上実在の人物が想起され、叙述されるプロセスへのメタヒストリーの関心であり、二つ目は、20 世紀前半に史劇を数多く執筆した劇作家、真山青果(1878~1948)の作劇の根底にあった歴史観に対する関心である。本発表は、青果を近代における歴史叙述・歴史解釈の系譜の中に、一つの転換点として位置づけることを課題とする研究の一環である。

本発表では、青果の作品の中から、「江戸城総攻」(1926)、「慶喜命乞」(1930)、「將軍江戸を去る」(1934)の3部作に注目する¹。時代設定は1868(慶応4)年。薩摩・長州を中心とする官軍は、鳥羽伏見の戦いで幕府軍に勝利した後、東海道を進軍し、3月15日に江戸へ総攻撃を仕掛ける計画を進めていた。上記3部作は、総攻撃の回避と15代將軍徳川慶喜の助命を願う幕臣の勝安房守(海舟)、山岡鉄太郎(鉄舟)たちが、官軍参謀である西郷吉之助(隆盛)に談判し、江戸城の無血開城を実現させる過程を描いている。

これら3部作の雑誌掲載と初演は、戊辰の還暦にあたる1928(昭和3)年を挟んでいた。戊辰戦争と明治維新を回顧する叙述が急増した1928年前後の時期に、青果は60年前の「史実」をいかに解釈し、描きなおしたかというメタヒストリー的な課題に、本発表は取り組むこととなる。

1. 戊辰還暦前後における歴史叙述の動向

青果は、第1部「江戸城総攻」の発表後に、本作の執筆背景に関する談話を残している²。談話によると、青果は松竹合名会社から「勝安房を主題とする一幕物」を依頼され、「最も人口に膾炙してゐるし、事件の経過発展などがそつくり劇的になつてゐる」江戸開城を題材に選んだ。その後、資料を読む中で青果は、江戸開城の「その蔭には、幾多の現れざる働き手があつてなされたものと思」い、益満休之助や山岡鉄太郎を登場させて、西郷・勝の会談以前のドラマから始まる3部作として執筆を開始した。

このように、青果は第1部執筆時から、全3部作の構想を練っていたが、結果として

¹ 本発表では、3部作の本文はすべて『真山青果全集』第7巻(講談社、1975年)から引用する。

² 真山青果『「江戸城総攻」に就て』『真山青果全集』第18巻(講談社、1976年)所収。1926(大正15)年11月の歌舞伎座での初演に際しての談話である。

第2部、第3部はそれぞれ数年おきに異なる雑誌に発表された。そして、完結までのこの8年間に、明治維新に対する社会の関心が高まりを見せていたのである。

1928（昭和3）年は、昭和天皇の大礼が行われた年であるが、同時に戊辰の還暦、明治維新から満60年に当たる年でもあった。この前後の時期に、幕末・明治維新期を回顧する叙述や、当該期を舞台とした文学作品が急増しており、「王政復古という近代の出発点を寿ぐのみだった従来のあり方とは異なり、国民国家日本が達成される過程があらためて問い直され」る、1930年代の歴史意識を準備した³。

代表的な事例として、『東京日日新聞』社会部が1927（昭和2）年12月27日から翌年2月4日にかけて連載した「戊辰物語」が挙げられる。60年前の江戸を知る古老たちから得た証言で構成されており、彰義隊や新選組など、かつて「賊軍」とされた幕府方の逸話を多く取り上げていることが特徴的である。この連載の担当記者の1人であった子母澤寛^{しもざわかん}は、独自で聞き取りを重ねて1928年8月に『新選組始末記』を出版し、大衆文学の第一人者となっていく。

また1928年は、昭和天皇の弟である秩父宮擁仁と、旧会津藩主、松平容保の孫娘にあたる松平節子との婚儀が行われた年でもあり、「賊軍」のレッテルをはがそうとする世論があらわれた⁴。すでに明治20年代から、会津藩の勤王精神を強調して「雪冤勤王型の維新史」を叙述する動きがあり⁵、戊辰の還暦前後には、会津出身の物理学者でもと東京帝大総長の山川健次郎が『会津戊辰戦史』編纂に取り組んでいる。

これらの取り組みの根底には、抗戦したがゆえに「賊軍」とされた人々への共感——とりわけ血縁や地縁にもとづく共感——があったと考えられる。そのため、そこに戊辰戦争を不必要な戦争であったとする主張は、見だしにくい。

これに対し、1928年を跨いで断続的に執筆された、真山青果の「江戸城総攻」以下3部作は、無用の戦争を避けようと動く人々に焦点が当てられている。この3部作は、子母澤より以前の大衆作家たちが、旧幕臣層による著述を参照しながら「なんとなく勤王派を是とする立場で作品をまとめるにとどまっていた」⁶ことと同じレベルで論じるべき作品なのだろうか。あるいは、作中に山岡鉄舟と徳川慶喜がそれぞれの勤王論を戦わせる一幕を用意したことなどに注目して、青果は明治維新の当事者たちの人物像を自分なりに描き直すことにより、独自の歴史解釈を示そうとしたとも考えられるのではない。以下では、後者の見通しに立って、3部作の分析を試みてみたい。

2. 真山青果の描く江戸開城(1)：避戦論に注目して

本節と次節では、作中の台詞に注目し、真山青果が江戸無血開城実現の要因をどのよ

³ 成田龍一『増補〈歴史〉はいかに語られるか 1930年代「国民の物語」批判』筑摩書房、2010年、17頁

⁴ 後藤康二「白虎隊テキストについての覚書1」『会津大学文化研究センター研究年報』8号、2001年

⁵ 田中彰「佐幕派の維新観」『明治維新観の研究』北海道大学図書刊行会、1987年

⁶ 尾崎秀樹「大衆文学における維新像」『歴史文学論 変革期の視座』勁草書房、1976年、35頁

うに解釈していたかについて検討する。結論を先取りして述べておくと、青果は、日本国民は天皇のもとで統合されるべきであるという点で当事者たちの意見が一致したため、無血開城が実現したと解釈したといえる。

主要な登場人物のうち、勝安房守と西郷吉之助には避戦論者となる転機が訪れる。彼らは共通して、戦争の残酷さを理由とした避戦論と、西欧列強の脅威を理由とした避戦論を説く。

まず、前者の避戦論を、第1部「江戸城総攻」で勝が語る。作中の勝は、たとえ江戸が総攻撃を受けても慶喜だけは救われる、ある「奇策」（横浜のイギリス公使館から保護を受ける）を用意していた。だが、山岡や益満との議論を経て、勝はこれまで総攻撃回避のために行動を起こさず、「西郷に勝つために、無慙の自我を貫かうとした」ことを悔やみ、「江戸の生霊五十万人を見す／＼火煙りのなかに泣き叫ばせることが出来ると思ふか」と思想を転換して、山岡による慶喜の助命嘆願に望みをかける。もっとも、青果が参照したという「海舟日記」からは、幕府方の嘆願が受け入れられないときには官軍に先んじて江戸市中に火を放つという焦土作戦を勝が胸に秘めていたことがうかがえるのだが⁷、江戸の人々に被害を与える愚かさを悟った作中の勝は、後に執筆された「将軍江戸を去る」に再登場した際にも、焦土作戦を語ることはなかった。

西郷が同様の避戦論を口にするのは、第3部「将軍江戸を去る」での、勝との会談の場においてである。会談の直前、西郷は政治の行方も知らず魚の値段で喧嘩する町人を眺めており、「胸が痛うなりました」「実に戦争ほど残酷なものはござせんア」と勝に胸中を明かす。

ここで、青果が1929（昭和4）年に執筆した戯曲「血笑記」を傍証として参照したい⁸。江戸開城後に起きた戊辰戦争の一局面、会津戦争の中で、会津の敗残兵、鎌柄源内は仲間を処刑するよう命じられ、斬首を続ける中で狂気へと追い込まれていく。青果は、武家に生まれながら農家の里子に出された源内に、戦争の意義など「何にも分らねえ」という台詞を口にさせる。それは、戊辰の還暦前後に高まっていた「朝敵」というレッテルへの反発とは異なる、人道主義的な観点からの戊辰戦争の捉えなおしであり、勝や西郷の避戦論と共鳴し合っている。

一方で勝と西郷は、西欧列強の脅威を理由とした避戦論をも展開する。「江戸城総攻」において勝が当初から危惧していたのは、幕府がフランスの支援を受け、薩長がイギリスに支援されて日本国を二分する内乱が起きること、そしてインドや中国のように列強の支配を受けることであつた。第2部「慶喜命乞」では、すでにイギリス公使館からの干渉を受けていた西郷が、「万国の公法」と「日本建国の大精神」との板挟みにあることを吐露し、勝と同様の認識を持つことが示される。「将軍江戸を去る」における勝と西郷の会談の場でも、再びこの問題は明示され、対外関係の緊張が、青果の明治維新観において重要な位置を占めていたことがわかる。

⁷ 勝安房『海舟日記』開国社、1907年、354頁

⁸ 前掲『真山青果全集』第7巻所収。

3. 真山青果の描く江戸開城(2)：勤王論に注目して

以上のような、勝や西郷の徹底した非戦論に対して、青果描くところの山岡鉄太郎と徳川慶喜は、抗戦も時によってはやむなしとする立場をとっていた。「江戸城総攻」で山岡は、西欧列強の脅威を憂慮し容易に行動を起こせない勝を批判し、「力で行く、誠で行く」ことを是とする。続く「慶喜命乞」でも、イギリスからの干渉に苦慮する西郷に向かって山岡は「理屈ぢやない」と断言し、慶喜助命の嘆願は、主君を持つ武士としての情に訴えるかたちで行う。

慶喜本人は、第3部「将軍江戸を去る」のみに登場する。彼は「外国人干渉の屈辱」を危惧する点で避戦論者に近いが、それでも薩長の台頭には反発を覚え、江戸からの退去を引き延ばそうとしている。この慶喜を説得し得たのは、皇室へのあるべき恭順の姿勢を説く山岡の勤王論であった。戦争を厭う勝や西郷に対して、山岡の行動原理は終始一貫して、慶喜の臣下という立場、延いては慶喜をも帰順させる天皇の臣民という立場に基づくのである。

総括すると、青果が「江戸城総攻」以下3部作で示したのは、国内における戦争の回避と、対外的な独立の確保、そして天皇を中心とした君臣関係の再構築という三つの論理の交点において、江戸無血開城は実現したという解釈であろう。対外的な独立の確保と国内における戦争の回避という論理からは、「慶喜命乞」において益満休之助が端的に言い表したごとく、「日本国内のことは日本人同士によつて解決しなければなりません」という結論が導き出される。その際の望ましい解決策として山岡は、後者の論理に基づいて「徳川家を潰し、将軍家を廃し、一天四海、その実力皇室に帰」することこそが「勤王」なのだと力説することになる。国民が天皇を中心にまとまり国内的平和と対外的独立を確保することが目指されたとき、江戸無血開城は実現したのだと、青果は解釈したのである。

おわりに

田辺明雄は、「乃木将軍」など実在の軍人を扱った青果の戯曲について、「青果がはっきり戦争を否定的に語ったのはいわゆる内乱戦争の、ある部分であって、外国との戦争は、(中略)祖国の運命を自己の運命にしようと決心することで終わっている」と総括した⁹。青果は、本3部作においては、天皇を中心として国内の融和を実現し対外的独立を確保するという展望を示していたが、第3部「将軍江戸を去る」が発表された1934(昭和9)年にはすでに満州事変を経過している。満洲事変からアジア・太平洋戦争にかけての時代に青果が史劇という表現方法でどのように向き合ったかについては、今後の課題としたい。

⁹ 田辺明雄『再説真山青果—青果と白鳥—』関西書院、1988年、108頁